

ビッカートンとギボンの言語創出実験

- 無人島にVSO言語、SVO言語、SOV言語の話者夫婦を1組ずつ住まわせ、子供たちの間にどのような特徴を持つクレオールが発生するかを観察する。

『月刊言語』におけるビッカートンのプロジェクトに関する報告

- 1982年7月号に「ピジン・クレオールの研究動向」という論説を執筆し、ハワイにおけるビッカートン教授のプロジェクトを中心としたピジンとクレオールの研究動向を概観したものである。

『言語のルーツ』の翻訳

- 原書が出版されると『ニューズウィーク』と『サイエンティフィック・アメリカン』誌に取り上げられ、大きな評判となった。
- 上司であった筧壽雄教授と相談し、翻訳することにし、翻訳陣を設定し、大修館書店に出版をお願いした。
- 1985年4月にデレック・ビッカートン著筧壽雄・西光義弘・和井田紀子訳『言語のルーツ』(大修館書店)が出版された。

ビッカートンの真のクレオールに対する条件

- 先行するピジンより生じたものであるが、そのピジンは2世代にわたっては存在しなかったものに限る。
- 人口の多くとも20パーセントが、支配言語を母語としていて、残りの80パーセントが、さまざまな言語集団からなるところに生じた言語